

## 第2編 わらべうたの源流をたずねて

高橋 知子

伝承童謡と呼ばれ子供達に親しまれている「わらべうた」は、いつ、だれによって作られ、その伝承の方法はどのようにしてきたものであろうか。

かねてこの事に興味を持ち、日本の古典およびマザーグースの世界を訪ねて源流を探し出そうとこころみた。

さらに、現今歌われている「わらべうた」と典型的なものは、どのようなつながりがあるか。また、その変革の経路も見たいと思った。

### I わらべうたの定義について

現在歌われている「わらべうた」は子供の歌ということで漢字の童謡と同義である。

しかし、現代の童謡がある一人の作家により作られた創作童謡に対して、不特定、多数の人によって生まれ今日に至っているものを、伝承童謡という名で呼んでいる。これが、すなわち「わらべうた」である。

日本古典において童謡と呼ばれていたものには、必ずしも「こどものうた」という意味ではないものもあった。童謡はもともと漢語で、童一わらべこども、謡一うた、と考えられていた。中国においては、もっぱら児童の歌とし

詩経古注「児童皆能為、故有童謡」

列子 「児童謡日」等の記述がある。

諸橋大漢和辞典の童謡について「児童の間に自然に発生して流行する歌」とある。

我国においては童謡に2種の意味があったと思われる。

一つは、政治や社会に対する風刺的なもの、政治上の異変を予知させる予兆のうた等、単純な児童のうたとはいがたいと考えられるものに対して「わざうた」の語をあてている。

それに対して、なんら大人の社会の影響をうけ

ず純粹に子供の社会の事をうたったものを「わらべうた」とした。

童謡に「わざうた」と「わらべうた」の両義があったと考えられる。

わが国で「童謡」の語は、日本書紀皇極紀2年冬十月、の記に初出。

“岩の上に小猿米焼く米だにも食<sup>た</sup>げて通らせ、山羊の老翁”

の謡があるがこれは、当時の政治的な出来事をうたったもので「時人説前謡之応曰」として、「岩の上に」をもって上宮に喩ふ。「小猿」をもって「林の臣」に喩ふ（林の臣は入鹿なり）米だにも食<sup>た</sup>げて通らせ、山羊の老翁をもって、山背王の頭髮斑雜毛にして山羊に似たるに喩ふ。また其の宮を棄てて深き山に隠れし相なり。

と記してあるのは、蘇我入鹿と山背皇子の事件を風刺し、大人の世界の出来事を歌ったもので、いわゆる“わざうた”と言われるものであろう。

しかし、原歌の意味はともかくとして表面的な意味は子供にも理解出来かつ興味も引いたものと思われ、子供達も大人のまねをして歌ったと思う。そして、しだいに原歌の意味は忘れ去られ、わらべうた的意味を持つようになったのではないかと思われる。

以上のような政治的風刺や批判を目的として作りながら しだいに「わらべうた」となった例は齊明紀、天智紀等にも見ることができる。これについては後に説明する。

多くの児童文学が、児童のために作られたのは、ヨーロッパでも日本でも、ごく最近の事である。18世紀以前のヨーロッパには、教会の教義を説くもの以外は、児童のために呈えられる読物というものはなかった。

日本においても、明治初期に巖谷小波によって

お伽話が作られるまでは、子供のための読物という物はなかった。その時子供達は何を読んでいたのか。

大人の読物の比較的わかりやすいもの、を話してもらったり、また拾い読みをしていたにすぎなかった。

童謡も全く児童読物と同じであった。大人の世界の政治向きのことを諷したうた、巷間のハヤリ歌が、表面しかわからなかったとは言え、子供の興味を引いて、童らの口にかかるから童謡と言ったので、子供のために作られた、無邪気な子供唄ではなかったのである。

しかし、とにかく子供等に歌われ、子供の世界の中に保存されていった事はたしかに童謡であった。

## II 我国古典における童謡の足跡

わが国で「童謡」の語の初見するのは、日本書紀である。この書より少しく足跡を拾って見たい。

皇極紀二年冬十月（干時、有童謡曰）

「岩の上に、小猿米焼く米だにも  
食げて通らせ山羊の老翁」

歌 意

上宮を入鹿が焼くから、逃げて行くのに米を食べ、腹支度をして行きなさい、山背の王よ——（わらべうた—岩波文庫）

天智紀九年（五月 童謡曰）

「打橋の集楽の遊びに出でませ子。玉手の家の八重子の刀自、出でましの悔はあらじぞ出でませ子、玉手の家の八重子の刀自」

歌 意

わらべによって単純に戸外の遊びに誘う意と取っていいのではあるまいか、歌垣に女を誘う歌とする説が有力であるが。

同十年春正月（童謡云）

「み吉野の吉野の鮎、鮎こそは島へも良き、え

苦しゑ、水葱なごの下せり下 吾は苦しゑ」

歌 意

鮎は島べを游泳してよかろうが、吾は水葱のもと、芹のもとの狭い所を窮屈に動いて苦しい境遇だ。

以上の歌に対して高木市之助は、「吉野川の鮎こそは島辺の芹や水葱の蔭に棲んでゐるのも結構だらうが、人間の私はこんな山奥の吉野川のほとりに蟄居してゐては苦しくてたまらない」との意味にとり、天智天皇と天武天皇の間の争い事にかこつけた、いわゆる当時の政治批判的なものと取っている。

また、漁民か農民の労働歌としているものもある（日本古典文学大系、古代歌謡集）

しかし、此の歌は、鮎と同じく水棲動物でありながら、鮒や鰻のように、水葱や芹の下の泥の中をもぐって泳ぐものに対し、吉野の子どもたちが、これを眺めてうたつたものと解せば、いかにも「わらべうた」本来の姿を呈しているものである。（吾郷寅之進 わらべうた）

天智紀十年春正月「童謡云」

「橋は己が枝枝生れれど玉に貫く時、  
同じ緒に貫く」

歌 意

橋の実はそれぞれ異なった枝に生っているが、それを玉として緒に通すときには、同じ一つの緒に通す意で、生れや身分才能の異っている者を、共に叙爵し、臣列にひとしく並べた政治をひそかにとがめ、やがて起る戦乱を諷した童謡としている。（日本古典文学大系日本書紀）

が、これをもっと単純なわらべの歌と考えられる。わらべが多くの橋の実をながめたり、緒につないで遊んだ時の子供らしい平易な歌であったと思う。これも本来のわらべうたに大人——世間——政治批判を附加したものであろう。

以上日本書紀の外に続日本紀においても、童謡として記されているものがある。

光仁天皇

葛城、寺の前なるや、豊浦ノ寺の西なるや  
おしとど、としとど  
楼井に白壁しづくや、よき壁しづくや、  
おしとど、としとど  
然しては国ぞ昌ゆるや、吾家らぞ昌ゆるや、  
おしとど、としとど

#### 聖徳太子伝暦

山背の菟手の枝枝 水金に相見えこそね、菟手  
の枝枝

以上のものは、童子らの謡ったものであることを明記しているので童謡と見てよいであらう。「おしとど」「としとど」の囃詞も子どもたちの歌ったものとしてふさわしいと思われる。

日本書紀、続日本書紀において童謡を見ると、大人が世相を歌ったもの、政治批判的内容のもの、または、祥、不祥の前ぶれが現れる時には何かの形をもって国内をめぐり、歌をうたって示すというものであったとされているが、しだいに歌だけが独立して、子供らのうたう歌——つまりわらべうたになったものと思われる。書紀に於ては「童謡と謡歌」の区別があったが書紀の古注に於ては同一視されて通説となっている。

ここに「わらべうた」の歴史的な変遷を見ることが出来るのである。

さらに時代が下がり、平安時代の催馬楽、風俗、今様の中には現代のわらべうたに非常に近いものも多く見うけられる。

ことに梁塵秘抄の中には興味あるユーモラスなものが見られるのである。

また、讃岐典侍日記の中に記された「ある雪の降った朝、幼ない鳥羽天皇が“降れ降れこゆき”とろずさまれた」という記事に現今の雪に対するわらべうたの断片的な語句を見出すことが出来る。

その他、以上のものには、月、蝸牛、蜻蛉等に現今のわらべうたの原型を見出す事が多い。

今興味あるものを記して見る。

#### 雪

雪の歌は古く平安朝以来、絶ゆることなく子供達のうたとなっている。

讃岐典侍日記——ふれふれ小雪

徒然草、181段——ふれふれこゆき、たんばのこゆき。

西鶴、本朝20不孝、巻二——雪こんこんや、あられこんこん。

閑吟集 249番——降れ降れ小雪丹波の小雪。

弄鳩秘抄——雪こんこんよ、おてらの茶の木に雪一ばいたまった。

民俗芸術 3巻——雪やこんこん、あられやこんこん、お寺の柿の木に一ばい積れ。

以上のわらべうたは2つの系統に分けることが出来る。「降れ降れこ雪」でうたいたすもの、「雪こんこん」ではじまるものと大略二種になるが、「降れ降れこ雪」の形の方が古いものである。

#### 蝸牛（かたつぶり）梁塵秘抄408

舞へ舞へ蝸牛 舞はぬものならば  
馬の子や牛の子に 蹴ゑさせてん  
踏み破らせてん 真に美しく舞うたらば  
華の園まで遊ばせん。

舞うは、蝸牛が円を描いて這いまわるのを、子供が見ていて名づけたものであろう。玩具などのなかったこの時代、虫、小動物は子供の遊び相手であった。舞へ舞へ蝸牛は子供がよびかけた童言葉である。角を出して舞う様子を見て、デンデン虫、デデ虫、マイマイ等の名称が出来たと思われる。

「舞はぬものならば、馬の子や牛の子に、蹴ゑさせてん、踏み破らせてん」は何々せぬなら何々するぞというおどしの古い唱えごとの発想を受けついだものと思われる。

「芽を出せ 芽を出せ 柿の種 出さぬと鉄でちよんぎるぞ」の例である。

「馬の子や牛の子に」は「牛の子にふまるな庭のかたつむり角のあるとて身をなたのみそ」（寂蓮法師集）があり、これも子供の伝承であろう。現今の「わらべうた」には、この影響をうけたものは数多くある。『日本伝承童謡集成』（北原白

秋編)より若干あげる。

つのでろでえろ 角一尺出さねと  
奥の奥の山へ持ってって、なたで角ぶっきるぞ  
(埼玉)

でんでん出虫 ではらの原で  
しいしがいっぴき舞ひよるぞ  
おんしも出て 舞はんか(愛媛)

「近世以後の角出せ槍出せ」に固定してしまわない以前の姿である。蝸牛わらべ歌史の上で最古であり最高のものである。

ただし、最後の「真に美しく舞うたらば、華の園まで遊ばせん」は大人の感覚であり、童謡らしからぬものを感じさせるといふ説もあり(西郷信綱—梁塵秘抄—177)、この点は後のわらべうたにも見ないし、大人の手が加わったものかも知れない。

### Ⅲ 『聖徳太子伝』の子守歌など

「聖徳太子伝十巻は鎌倉時代の極末期、後醍醐天皇の御代に出来たものであるから、従ってこの書中に見える子守歌はむろん当時のものでなければならぬが、すでに当時に於ても早くも転訛した形も存している。その作られた時代は更にそれより以前でなければならぬ事になる」——鎌倉時代末期の子守歌——岡田希雄

以上のような論考があるが、『聖徳太子伝』成立時期(全十巻、寛文六年刊)については、考察が加えられるべきだとは思いますが、我国における子守歌の、文献上確認できる最も古いものとされている。

寝いれねいれ小法師  
ゑんのゑんの下に  
むく犬の候ぞ  
梅の木の下には  
目木羅々のさぶらふぞ  
ねんねん法師にををつけて  
ろろ法師に引かせう  
露々法師にををつけて  
ねんねん法師に引かせう  
御めのとほどこへぞ  
道々の小川へむつき濯しに

ねんねん ねんねん ろろろろ  
梅の木の下には  
目きららのさぶらふぞ

厩戸皇子降誕の条に見える子守唄、乳母に選ばれた5人の姫達が太子の成育を祈りつつ歌ったとしている。

子守歌の眠らせ歌には2通りある。静かに安心して眠りに入らせる歌と脅し怖がらせて強制的に眠らせようとするものである。この歌は後者である。えんの下のみく犬や梅の木の下のみきららは、怖がらせてはやく眠らせようとしているのである。

小法師 ——愛する幼児をよぶ語、坊ちゃんの意味

目きらら——目のきらきら輝いて居る動物又は空想上の怪物

ろろ法師——ねんねんと同様子供をねかしつけるあやし言葉

むつき ——産衣、おしめ

脅し型の種類をあげれば

ねんねこやあい ねんねこやあい  
泣けばあ、化物<sup>もんこ</sup>に取ってくはれる  
(岩手童謡集成子)

ねんねん ころころ ねんころや  
寝ないと鼠に引かれんべ  
起きると夜鷹にさらわれる  
ねんころ ねんころ ねんころや  
泣くといなごに弾かれる  
泣かねといなごにめでなどされる  
ねんころりん ねんころりん  
(山形童謡集成子)

ねんねんねんよ ねたら山の雉の子  
起きたら狼が飛んで来る。  
(京都童謡集成子)

また、「御めのとほどこぞ」以下のパターンに

ついで、現在各地で歌われている子守歌に多くの例を見ることが出来る。

ねんねのお守はどこに行った

しんめえ むつつうああらいに

洗って来たらどこに乾す

お寺の門前桃の木に

(愛知童謡集成子)

ねんねんようよう おこらりよ

ねんねんもうやはどこへ行た

あっちのあっちの木曾川へ

しめしやむつきをああらひに

ああらい川でああらって

さあらし川でさあらいて

お寺の茶の木にかけといた

(尾張童謡集)

近代の子守歌に濃い伝統の残っている事が知られる。

また、この種の子守歌は、東南アジア、満州地方にも見られるものである。

ねんねんよう ねんねんよう

馬虎がきたよ 狼がきたよ 虎がきたよ

お寺の坊さんも大鼓背負ってきたよ

(満州農村民謡集)

このほか、当時の子供の遊び、生活を偲ばせるものがあるので、2、3上げて見たい。

○頭に遊ぶは頭虱——(梁塵秘抄 410)

頭に遊ぶは頭虱 項の窟をぞ極めて食ふ

櫛の齒より天降る

麻小笥の蓋にて命終る

虱は我国の古典には早くより見える。古事記にスサノオが頭の虱をオオクニヌシに取らせた話は有名である。また、最近まで我々の生活の中でもお目にかかった動物である。大変ユーモアにとんだ歌だと思ふ。

○居よ居よ蜻蛉よ——(梁塵秘抄 438)

居よ居よ蜻蛉よ、堅塩参らんさて居たれ

動かで 簾篠の先に馬の尾繕り合はせて

掻い附けて

童冠者ばらに繰らせて遊ばせん

平安朝末期の子供達が馬の尾の毛でとんぼの胴をくくり、すだれなどの端に結んでおいたり、オトリのとんぼをとばしたりする子供達の遊びが描写されている。

今昔物語、宇治拾遺物語の「わらしべ長者」に出て来る青侍が虻を薬でゆわえて飛ばしながら行く図も想像される。

とんぼ とんぼ とんぼ 止まれ

塩やいて食わそ

(兵庫童謡集成)

とんぼ とんぼ おとまり 明日の市で

塩買うて ねぶらしよ

(高知童謡集成)

○茨小木の下にこそ——(梁塵秘抄 392)

茨小木の下にこそ いたちが笛吹き

猿舞で かい舞で

稲子磨賞で拍子つく

さてきりぎりすは

鉦鼓の 鉦鼓の好き上手

(茨小木の下にこそ——野イバラの茂みの下で)  
(稲子磨——しようりようパッタ、蝗ではない)

児童は単に虫も心ありと空想し得たのみならず、しばしば彼等を遊び相手とするために、特に似合ひの名を見つけて天然の友に贈らうとしたわけだが、イナゴマロなども、童児らの命名に違いない。(柳田国男 蟻螂考)

当時、この歌は人気があったらしく、『狭衣物語』『弁内侍日記』『体源抄』等にも見える。有名な鳥獣戯画を思い起させる。動物に付されている動作は一つ一つの動物の特徴を適格に捉えられている。身のまわりの自然、動物や植物に対する観察は厚い蓄積があるのである。

これに引き合いに出される田植草紙の歌をのせておこう。

山が田を作れば 面白いものやれ  
猿はささらする 狸は鼓打つとの  
打てば好う鳴る 狸の大鼓おもしろ  
昔より ささらは 猿が好うする  
現在遊びうたとなっている「つぶや」の原形として、

淀河の底の深きに鮎の子の  
鶺鴒といふ鳥に背中食はれて  
きりきりめくいとをしや  
(梁塵秘抄 475)

田螺<sup>つば</sup>どの つぼどの お彼岸まいりに行かまい  
か お彼岸まいりはよいけれど  
鳥といふ黒鳥が 足をつつき 目をつつき  
それで私はよう行かん  
(日本伝承童謡集岐阜)

つぶや つぶや ぬきつぶや  
からすという ばか鳥に  
ずっくり むっくり さされた  
(宮城県)

淀の川瀬の水車 誰を待つやら  
くるくると  
(女歌舞伎謡歌)

宇治の川瀬の水車  
何とうき世をめぐるらう  
(閑吟集)

淀の川瀬の水車  
明けても暮れても水が出る  
でんでんぐるま でんぐるま  
出なかま打ち破う  
(京都、輪遊びの歌)

淀の河瀬の水車

どンドン落ちる滝の水  
子供や子供  
今に夕立降って来るドドドード  
以上で、現在のわらべうたの原形、あるいは原形に近いもの、また興味あるもののいくつかを、古典より探し出し記した。

#### IV 「マザーグース」とわらべうた

次に日本のわらべうたとの比較対象のために「マザーグース」（英語わらべうた）に触れて見たい。

「マザーグース」とは英語を母国語としている英、米、カナダ、オーストラリア、ニュージーランドにおけるわらべうたの名称である。

アメリカ、カナダにおいてはNursery Rhymesという名で呼ばれている。

名前の由来はある実在の人物の名前、またはガチョウの歌等の説があるがはっきりしたことはわからない。

マザーグースは老若男女、階層教育水準などを問わず、英米社会の全体に及ぶ大人と子供の共同の国民的文化財の性格を持っている。

我国のわらべうたが専ら子供だけなのとは趣を異にする。最も日本でも、早い時代には大人の歌だったものを、子供も歌ったものなので、大人、子供共用の時代もあったのである。マザーグースは今なお大人と子供共用なので、内容的には子供に不向だと思われるものもある。

マザーグースの現在伝わっている唄の過半数は17世紀初期に出来たものと思われる。

ただし、何編かの歌は2千年前のものもある。

新約聖書 マタイ伝 11章 17

ルカ伝 7章 22

わたしたちが笛を吹いたのに

あなたたちは 踊ってくれなかった

弔いの歌を歌ったのに

胸を打って くれなかった

○古代ローマの子守唄

○ホラティウスが詩歌にとり入れた遊び歌

(King of the Castle……正行をする者は王となり得る)

以上のものは、古代文化から残されて来たわずかの“わらべうた”であるが、これを見ると現在のものとあまり変りはないと思われる。

マザーグースの大部分は、もともと子供のために作られたものではない。大人の世界のわいせつな笑い話や、酒盛り唄をうたったものが多い。むしろ子供には聞かせたくないような歌を大人と一緒に子供達が歌っていた。

17—18世紀前半にかけて、子供は大人の小さいものとして、大人同様の取扱いをうけていた。18世紀後半になり子供は見直され、子供は子供としての取扱いをうけるようになり、はじめて子供のためのマザーグースが出来上ったのである。

これは我国のわらべうたの発生と全く同じ経路をたどったものである。

我国にマザーグースが紹介されたのは、大正11年(1920)北原白秋——赤い鳥。昭和4年(1964)竹友藻風によってである。近時、非常なブームの谷川俊太郎の独創的な翻訳により、広く読まれ親しまれるようになった。

しかし、マザーグースは英語圏独自の習慣、生活様式、自然、社会環境、思考の形式等、日常生活に密接な関係を持っているので、これを知らなければ、本当に理解する事は出来ない。が、今ここに我国のわらべうたとの比較をこころ見るのは、一つの冒険であるが、どこの国の文化にも、生命力を持っている限りある共通点は見出し得ると思うからである。

子供はやはり小動物(虫)等に関しては、同じような発想があるものだと感じた。

○かたつむり

つのでろ であろ 角一尺さきねと  
奥の奥の山へ持ってって  
なたで角ぶつきるぞ

(埼玉)

でんでんむし でんでんむし

お前のお家から出ておいで  
さもなきや石炭のように真っ黒にして  
こらしめるぞ

(マザーグース)

○家焼けた

鳥家焼けた 早く行って水かけろ  
鉄砲もってどんどん  
弓もってばづ ばづ

(総合日本民俗語彙岩手)

鳥勘左衛門 うぬが家は焼ける  
早く行って 水かけろ

(守貞漫稿)

てんとうむし てんとうむし

家へとんで帰れ お前の家は火事だ  
子供たちが焼け死ぬぞ

(マザーグース)

マザーグースがイギリス国内における確固たる社会的な基盤を持ちつづけているのは、イギリス人が伝統的にいだいているユーモアの精神、ナンセンス(冗談)の気質によるものであろう。マザーグースに深い愛情と親しみを持ちつづけているのである。その研究も長い年月をかけて包括的な集成を経て今日に至ったものである。

18世紀後半 ニューベリー「マザーグースのメロディ」

19世紀中葉 ハリウェル「イングランドの童謡」

20世紀中葉 オーピー夫妻「オックスフォードわらべ唄辞典」

以上の様な長い年月に渡る研究により、権威のある確固とした土台を築くことが出来た。

我国のわらべ歌も、かつては街頭や家庭で歌われていた時期があったが、明治の新制度の学校教育から完全にしめ出されてしまった。これにより急速に衰退してしまった。わらべうたは良くない

ものだから歌わせてはならないという通達まで出した小学校もあった。

「わらべ唄はあしきものに候ハバ、きびしく御止めなさるべく候」（日本の子どもの歌——園部三郎，山住正己共著）

日本の学校教育の一元的統制力が強力であった事もたしかであるが民族の気質として、ユーモアを解する事が少なく、馬鹿まじめで余裕のないことも、わらべうたを支える社会的な基盤を持ち得なかったことは、たしかであらう。

明治以降の学校教育が自国の伝承文化に無理解であり偏見を持っていた結果、せつかく味わい深いわらべうたを子供達から取り上げてしまい、小学唱歌に追いやり、興味うすい音楽の時間を作り上げてしまったのである。

また、日本語の変遷が激しくて、過去の文献をすでに理解することが困難になってしまっている

ことも一つの理由である。

それに比して英語は、ほとんど語幹の変化がなく、また変化の少ない所を比較的多くマザーグースに取り入れているので、現代においても、困難なくそのまま理解出来るということも大きな原因であろう。

ポールアザールは「マザーグースは民族の持っている魂の、それも光も届かないような暗い奥底から出てくるかのように思われる子守唄である」（本，こども，大人）と言っている。

ウォルターデ，ラ，メアは「空想を解き放ち、舌と耳を魅了し心の眼を喜ばせるわらべうたは、こどぼのたくみの傑作であり、詩への紛れもない近道である」とうたいあげている。それに比し、我国のわらべうたの現状は誠に残念であり、反省すべきであると今更の如く思われるのである。

#### 参 考 文 献

- |              |             |
|--------------|-------------|
| わらべうた        | 吾郷寅之進 真鍋昌弘著 |
| わらべうた        | 町田嘉章 浅野建二編  |
| 梁塵秘抄         | 佐々木信綱校訂     |
| 梁塵秘抄         | 西郷信綱        |
| マザーグースの歌     | 平野敬一著       |
| マザーグースのすべて   | 日本児童文学 別冊   |
| 日本古典文学大系日本書紀 |             |

(大学・音楽研究室)  
(短期大学・保育科)